

# 紀 要

第 6 号

---

---

## 目 次

粟津湖底遺跡出土の木質遺物	(伊 東 隆 夫)
弥生時代の木偶と祭祀 —中主町湯ノ部遺跡出土木偶から—	(濱 修)
県内における磨製石斧の消滅年代について	(井 上 洋 介)
土師器甕の変遷とその背景 —近江型土師器成立への諸段階—	(大 崎 哲 人)
草津市笠山古窯出土遺物の紹介	
—笠山古窯の位置づけをめぐって・瀬田丘陵生産遺跡群の検討—	
	(畑 中 英 二)
倭京の実像 —飛鳥地域における京の成立過程—	(相 原 嘉 之)
近江八幡市大手前・御所内遺跡出土の銅印をめぐって	(田 路 正 幸)
将棋史研究ノート(3) —王将と玉将—	(三 宅 弘)
近江国坂田荘の開発(中) —長浜市大東遺跡を中心として—	(北 村 圭 弘)
滋賀県八日市・永源寺地域における蔵王産花崗岩製中世石造美術の分布	
—八日市市・永源寺町石造美術石材分布調査概要—	(兼 康 保 明)
滋賀県出土の埴輪資料集(その3)	(稲 垣 正 宏)

---

---

1993. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

# 県内における磨製石斧の消滅年代について

井上 洋介

## 1. はじめに

平成4年の第31回埋蔵文化財研究集会は、弥生時代の石器—その始まりと終わり—というテーマで開催され、全国各地の弥生時代の石器に関する資料の集成が行われた。その資料集によれば、滋賀県からも未報告資料を含めた石器の出土例が集められているが、滋賀県においては弥生時代の集落遺跡の発掘調査の良好な報告例が少なく、弥生時代の石器について体系的に論ずるには、資料不足の感を否めない。

土器などに比べて形態の時期的変化のとらえ難い石器の研究にあたっては、伴出土器の判明する一括資料が不可欠である。しかしながら一般には、石器の出土例の大半は包含層や溝、自然流路などといった一括性に乏しいものである。これは使用形態や廃棄方法が土器とは異なることも大きな要因であろう。具体的には、伐採用の斧や石鏃は、集落外での使用、廃棄といったパターンが考えられよう。

本稿においては、良好な資料不足の現状に鑑み、テーマを磨製石斧の消滅年代に絞った。また、各時期の遺物の混在する自然流路からの出土資料などでも、出土土器の年代幅から石器の時期の推定できる資料は積極的に活用していく立場をとる。現段階においては、検討の対象となる資料を少しでも増やすための次善の策と考えるからである。

## 2. 資料の提示

磨製石斧の消滅年代を論じる資料として、弥生時代後期（V期）以降に廃棄されたと見なし得る資料を提示したい。

### 1) 森前遺跡<sup>(1)</sup> 長浜市今町

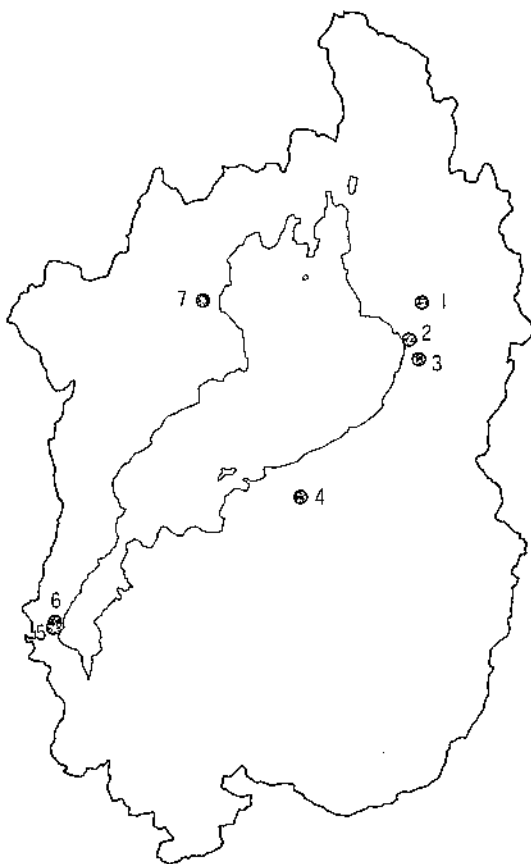
昭和62年度の県営ほ場整備事業の事前調査において、弥生時代後期から中世初頭の遺構、遺物が検出されている。このうちD地区のSX1から、弥生時代後期の土器とともに、刃部を欠損した石斧が出土している。SX1は幅3mを測る大規模な溝であり、報告書に図示された伴出土器を見る限り、後期後半の遺物のみを出土している。

### 2) 高橋南遺跡<sup>(2)</sup> 長浜市高橋町

平成元年度の県営ほ場整備事業の事前調査において、主に古墳時代以降の遺構、遺物が検出されている。C3地区の下層遺構面の溝状遺構から、基部を欠損した磨製石斧（大型蛤刃？）が出土している。石斧の表面には敲打痕があり、転用に伴うものと思われる。伴出土器には弥生時代後期に遡るかと思われる小片もあるが、庄内～布留式並行期のものが主体である。

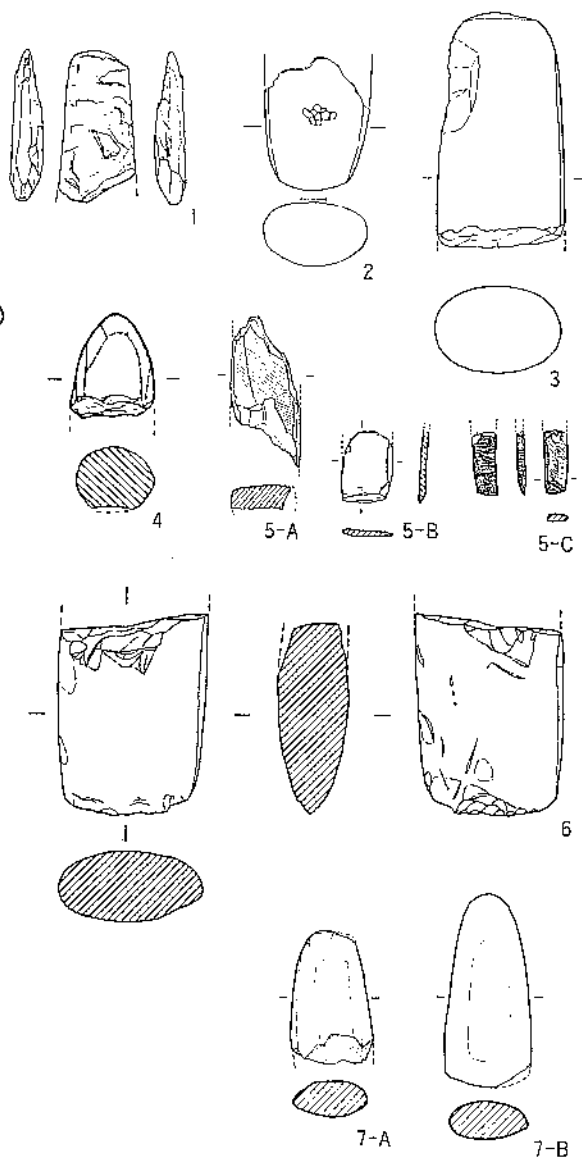
### 3) 奥松戸遺跡<sup>(3)</sup> 坂田郡近江町長沢

一般国道8号長浜バイパス工事に伴い、昭和57～58年度に発掘調査が実施され、弥生時代中



遺跡位置図

1. 森前遺跡（長浜市）
2. 高橋南遺跡（長浜市）
3. 奥松戸遺跡（坂田郡近江町）
4. 柿堂遺跡（神崎郡能登川町）
5. 大伴遺跡（大津市）
6. 上高砂遺跡（大津市）
7. 杉沢遺跡（高島郡今津町）



野洲川流域における石器群の消長  
 (註10)文献より引用)

時期	磨製石刃丁	磨製石剣	磨製石楯	大型磨製石斧	柱状石斧	打製石楯	打製石斧
2							
3							
4							
5	×						
6	×	×	×	×		△	△
古						△	△
新							

×ほとんど消滅する。  
 △確実に存在する。△若干含まれる。

- ・遺物番号は遺跡番号と対応する。
- ・遺物の縮尺は1/4

期以降の遺構、遺物が検出されている。このうちH区の溝状遺構SD5から、刃部を欠損した磨製石斧（太型蛤刃?）が出土している。伴出土器は弥生時代後期後半から庄内式併行期のものと見なし得る。

#### 4) 柿堂遺跡<sup>(4)</sup> 神埼郡能登川町大字今

工場拡張に伴う事前調査として、昭和59～61年度に発掘調査が実施され、縄文時代から中世にいたるまでの時期の遺構、遺物が検出されている。弥生時代には方形周溝墓群などが営まれており、そのうちの1号墓に伴って磨製石斧（太型蛤刃?）の基部が出土している。1号墓の築造時期は、周溝内から出土した土器から判断して、弥生時代後期初頭である。磨製石斧の出土状況は、報告書の記述を読む限りでは、明かでない。

#### 5) 大伴遺跡<sup>(5)</sup> 大津市南滋賀町

国道161号線バイパス工事に伴って昭和55、56年度に発掘調査が実施され、縄文時代から中世にいたるまでの時期の遺構、遺物が検出されている。D地区においては、弥生時代中期から後期にかけて、竪穴住居群が切り合いを有して築かれている。このうち後期後半～末頃の土器を出土するSB3から形状不明の磨製石斧（5-A）が、SB4からは扁平片刃石斧2点（5-B, C）が出土している。扁平片刃石斧はいずれも小型のものであり、基部は欠損している。

#### 6) 上高砂遺跡<sup>(6)</sup> 大津市高砂町

一般国道161号西大津バイパス建設の事前調査として昭和62年度に発掘調査が実施されており、平安時代を中心とする遺構群が検出されている。調査区東部の溝SD18から磨製石斧1点が出土している。基部を欠損する太型蛤刃のものである。SD18出土土器には弥生時代後期末から古墳時代前期とされる一群と、大きく時代の下るものがあるが、石器の所属年代は弥生時代後期末から古墳時代前期と考えて大過あるまい。報告書掲載の土器をみる限り、出土土器の主体は布留式並行期のものであり、庄内式並行期のものも若干含まれる状況である。

#### 7) 杉沢（弘川）遺跡<sup>(7)</sup> 高島郡今津町大字弘川

昭和54、55年度の県営ほ場整備の事前調査において、第1区の竪穴住居4から磨製石斧2点が出土している。7-Aは刃部を欠損しているが、形状からみてA, Bともに太型蛤刃石斧と考えられる。竪穴住居内からの伴出土器は、弥生時代後期末の一括資料と見なし得る土器群である。

### 3. 磨製石斧の消滅年代

前節において7遺跡10例の磨製石斧の出土例を提示した。弥生時代全般において時期のおさえられる出土資料の少ない状況の中で、7遺跡という数は決して少なくない。弥生時代後期においても磨製石斧を使用していたと考えられる遺跡が少なからず存在したことが確認できよう。その分布は湖北、湖東、湖西北部、湖西南部におよび、極端な地域性は見られない。例示した資料の中には、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期幅の中でしか捉えられない資料もあるが、布留式並行期の土器との確実な共伴例がないことから、庄内式並行期頃に磨製石斧の使用がほぼ終了するとしておきたい。

近畿地方における石器の消滅については、一般には弥生時代後期に急速に姿を消していくと言われながらも、細かい点については十分な研究がなされていないのが実状である<sup>(9)</sup>。後期後半になっても中期と変わらぬ石器組成を示す遺跡もあるとの指摘もあり<sup>(9)</sup>、各地域における各器種ごとの存続年代を詳細に検討することが必要であろう。

滋賀県においては、伴野幸一氏によって、野洲川流域における石器消滅についての見解が示されている<sup>(10)</sup>。伴野氏は周辺の弥生時代の遺跡を未報告資料も含めて検討し、弥生時代中期末には主要な石器が消滅すると述べている。磨製石斧に限って言えば、野洲川流域においては伴野氏の見解を積極的に否定する材料はない<sup>(11)</sup>。この地域においては、石器から鉄器への移行が早かった可能性があるとしておきたい。遺跡単位で見ても、磨製石斧の消滅の早い遺跡が存在する可能性はあるが、現段階では弥生時代後期後半まで磨製石斧を保持した遺跡が少なからず存在したことを述べるにとどめておきたい。

#### 4. 今後の課題

以上、極めて不十分な資料ながら、滋賀県における磨製石斧の消滅年代を検討してみた。本稿においては磨製石斧を一括して論じたが、刃部の破損によって種類の不明な石斧片が多かったためである。弥生時代後期においても出土例の確認できる大型蛤刃石斧と扁平片刃石斧以外の器種は、弥生時代全般にわたって出土例が乏しく、現時点で議論することは困難であるといえよう。

弥生時代後期以降における磨製石斧の残存例のみに注目するのは一面的な見方であるし、石器の消滅過程を研究するにあたっては、石器を出土しなかった遺跡を積極的に資料化することも必要であろうが、現在はまだ十分な方法論を準備していない。今後の課題とすべき点は多く、浅学故の事実誤認もあろうかと思う。御批判、御指導願えれば幸いである。

なお、出土遺物を実見する余裕が無かったため、遺物の観察は報告書の記述に基づいている。出土状況についても同様であるので、各調査担当者から詳細をご教示願えれば幸いである。また、本稿を成すにあたって、冒頭に記した第31回埋蔵文化財研究会の資料集は大変参考になった。資料を集成頂いた各氏に敬意を表したい。ただし、未報告資料については、共伴遺物の未整理の可能性を考えて、資料としては用いなかった。

#### 註

- (1) 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X V - 1 長浜市森前遺跡、国友遺跡、小沢城遺跡、坂田郡近江町正恩寺遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1988年
- (2) 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X VIII - 3 高橋南遺跡 (I)、高橋遺跡、安導寺遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1991年
- (3) 『一般国道8号(長浜バイパス)関連遺跡発掘調査報告書VI 『奥松戸遺跡』』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1989年
- (4) 『能登川町埋蔵文化財調査報告書 第8集 柿堂遺跡』能登川町教育委員会 1987年
- (5) 『大伴遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1983年

- (6) 『大津市埋蔵文化財調査報告書(20) 上高砂遺跡発掘調査報告書—一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う—』大津市教育委員会 1992年
- (7) 『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ-3』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1981年  
報告書の表題は弘川遺跡であるが、本文の記述によれば第1区付近は杉沢遺跡に含まれるとされている。
- (8) 酒井龍一「畿内の弥生石器」(『考古学ジャーナル』No.290 1988年)
- (9) 千喜良淳「石器から鉄器へ」(『関西大学考古学等資料室紀要』第5号 関西大学考古学等資料室) 1988年
- (10) 『二ノ畦遺跡発掘調査報告書 守山市文化財調査報告書第30冊』 守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター 1988年
- (11) 笠原南遺跡(守山市)の第5トレンチSD-11下層出土の磨製石包丁や石田三宅遺跡(守山市)第3遺構面SD30出土の石のみは、布留式の土器に伴っており、これらの遺物を混入とみなすのか、例外的存在とするのかは、今後の出土例の増加を待ちたい。

編集後記

今年の『紀要』は例年になく原稿の集まりが早かった。これも偏に各執筆者の日々の精進の賜物か。

今後も、洛陽の梓価を高めるような『紀要』であり続けたい。

編集者

平成5年3月 初版  
平成6年3月 2刷

紀 要 第 6 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大萱町1732-2  
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社  
大津市富士見台3番18号  
Tel(0775)33-1241